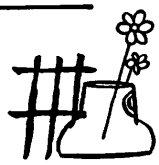
巻頭言



「情報処理」家族への期待

千葉　常世†

学会では年に2回，支部長が集まり，各支部の活動状況を話し合ったり，本部への要望を出していただいたりしている．先日その支部長会で，ある支部長から，初等中等における情報処理教育について学会としてなにか考えているか，考えていないなら考えてくれ，という要望が出された．その場の話の流れから，やや唐突な問題提起だったが，たいへん重要な課題だ，会員に直接関与しない問題だけれども，……等としばらく議論の後，本部としてもどうするか考えてみましょう，ということになった．

いうまでもなく，我々を取り巻く周辺には情報化の波が押し寄せ，情報処理と我々の生活とは，陰にも陽にも，切り離せなくなってきている．それだけに一層，情報処理に携わる我々「家族」に対する期待が高まり，社会への関心と責任，リーダシップへの自覚が求められている．また，企業活動においても，情報は第Xの資源として重要視され，CIO (Chief Information Officer) と呼ばれる戦略的役割を担うものも出てきている．

このように情報処理と社会との関わりが増し，期待が膨らむ中にあって，我々「家族」の自覚と活動は，はたして期待に添ったレベルにあるだろうか．「日本のメーカは技術力が高くても，標準化に対する発言力では欧米に歯がたたない」といった声も聞く．「TVが子供に与える影響」を立派な論文にしてしまう米国に対し，我々の場合はどうだろうか．

若者の理工系離れ，女性の再就職，生涯教育，ソフトウェアの知的所有権，ライフスタイルの変化に伴う制度問題，等々，社会に対して発言していく問題は多い．これらに直接関わらないとしても，我々の得意な切口から関連を持つことが大切であろう．

そもそも，「情報処理」は人工物を対象とするものであり，人間や社会と離れては発展しない．進展の激しい社会の動きや要請にダイナミックに応えていくためには，学会らしくないとか，この範囲にあるべきだといった限定的対応でなく，現実の問題に飛び込んでいく逞しさが望まれる．現実の世界は，基礎的な研究課題の宝庫である．日常世界で提起された問題だから基礎的でないとか，身を落すことだとする考えはあたらない．不透明な現実の問題に取り組む中から，伸びのあるインパクトの大きいテーマを発掘し，将来を方向づけることを期待したいのである．

冒頭の初等中等教育の問題も，literacy とか「情報処理」予備軍の育成といった範囲にとどめずに，認知心理学と結託して人間の知的特性を新しい視点から探るならば，伸びのあるテーマに発展しないだろうか．また，TV ゲームやパソコンが子供に与える影響とともに，これらが子供の能力を伸ばす可能性を探ることも興味のあるテーマではないだろうか．

日本のハードウェアは進んでいるが，ソフトウェアはどうか，という質問をよく受ける．しかし，このソフトウェアかハードウェアかの問題は，“What to make” か “How to make” かの問題であって，新しい概念やテーマの提案力を問われているものと思う．考えてみれば，先進国からの学問や技術の導入は，テーマの導入でもあった．先進国として世界に寄与するための我々の課題は，インパクトの大きい課題の提案にあるのではないだろうか．研究会，全国大会，論文誌等でも，不透明な問題提起を受付ける度量と，概念やテーマの提案を尊重する雰囲気を大切にしたい．

過去を振り返ると，今さらながら，進歩の大きいのに気づく．20年前の大型計算機を我々は個人で手にしているし，現在当り前になっている各種の情報システムも，かつては誰も考えなかったことである．同様に，本学会が50周年を迎える西暦2010年頃には，今日の情報システムが旧式で幼稚に見える程発展し，一層社会に浸透しているに違いない．「情報処理」がより広い視野と逞しさをもつとき，21世紀における「家族」の社会的地位と発言権が高まり，社会から一層頼りにされる存在となるのではないだろうか．

（平成2年10月8日）

† 本会理事　(株)日立製作所